住所　〒060-8711　北海道新聞生活部（郵便の宛先は住所不要です）
●電　話 011・210・5605
●ファクス 011・210・5607
●電子メール seikatsu@hokkaido-np.co.jp
●ツイッター @doshin_seikatsu

生活

夜に集う「子育てサロン」

札幌に初めて誕生

▲おしゃべりしながら、夕食を楽しむ「おかえりひろば」の参加者たち

「こんばんはー」。20日午後5時。札幌市豊平区の非営利団体「ねっこぼっこのいえ」（月寒東1の2）が拠点とする民家に次々と親子が集まった。代表の小林真弓さん(46)が「おかえり」と笑顔で出迎えた。あっという間に室内は人でいっぱいに。初の夜型子育てサロン「おかえりひろば」が始まった。

「ねっこぼっこのいえ」は2007年から週3回、子育てサロンを日中に開いている。毎回、乳幼児と親、住民ら40人前後が集い、多世代の交流の場として地域で定着している。

こうした活動を通じ、小林さんは、仕事で夫の帰りが遅く母子だけで夕食を取ったり、親が仕事で日中のサロンに参加できない家族らを支援するため、夜に地域住民らが集える場をつくれないかと考えて、「おかえりひろば」を開設した。

NPO法人子育てひろば全国連絡協議会（神奈川）によると、こうした地域子育て支援拠点は全国で約7千カ所あるが、夜型の子育てサロンは珍しいという。

初回のこの日は、56人が参加した。おもちゃや絵本を手に遊ぶ子どもたちや、おしゃべりを楽しむ母親たち、大学生らに勉強を教えてもらう中高生の姿も見られた。途中で食事の時間も設けられ、スタッフが作った夕食や持参したお弁当を食べながら語り合い、午後8時に解散した。

5歳と2歳の息子を連れて参加した主婦田口美保さん(40)は「夫の帰りが遅く、夜は息子たちと3人で食事することが多い。子どもたちにいろんな人に関わってほしいと思い参加したが、私自身がいろんな人と話せて気分転換できた」と満足そう。以前から「ねっこぼっこのいえ」の活動に携わっているという、会社員の倉本由梨亜さん(27)は「夜なら仕事を終えて参加できる。いろんな人と交われて、楽しいです」とほおを緩ませた。

日中のサロンは札幌市からの助成金で運営しているが、「おかえりひろば」は全くのボランティアだ。今後1年間、毎月第3金曜日に試行を続け、参加者の声を採りながら継続するかどうかを判断する。

小林さんは「人とつながりながら子育てするのは、親にとっても子どもにとっても大切なこと。生活スタイルの多様化に合わせ、柔軟にこうした場を提供してきたい」と語る。

> 東京都内では、3年前から実践している任意団体がある。国分寺市の「まちのおやこテーブル」だ。
>
> 代表の小林洋子さん(42)は会社員で2児の母。周囲の母親たちに声をかけ、定期的に市内の飲食店や市民団体の事務所を借りて、夜に食事しながら交流する場を設けてきた。
>
> 現在は2、3カ月に1度のペースで開き、毎回10～15組の親子が参加。テーマを決めて勉強会をしたり、読み聞かせ講座を開催したりすることもある。
>
> 小林さんは「親子が気兼ねなく集まり、たまに息抜きできれば子育ての大変さも少し和らぐのではと考えた。子どもをともに育て、支え合う地域の輪を広げたい」と話している。

「おかえりひろば」は参加無料（夕食は有料）。問い合わせは「ねっこぼっこのいえ」☎011・852・1100へ。

夕刻から親子が次々■食事で交流「気分転換」

がん対策関係者学ぶ　東京でサミット

全国のがんの患者、行政担当者、医療者らが、地域のより良いがん対策を目指す勉強会「がん政策サミット2017秋」が東京都内で開かれた＝写真＝。

NPO法人がん政策サミット（東京）主催で6～8日に開催。北海道を含む全国から約80人が参加した。

15回目の今回は、各都道府県が策定中の第3期がん対策推進計画（2018年度から）を、患者らにより成果をもたらす内容にすることなどを狙いに議論。参加者はがん対策の計画づくりに携わる委員が中心で、それぞれが次期計画の素案を持ち寄って検討した。

がん政策サミットの埴岡健一理事長は「10～12月の3カ月が（次期計画づくりの）大事な時期。大切なのは患者が（行政などさまざまな関係者と）一緒に計画を作って取り組んでいくこと。（計画を）変えるのはみなさんです」と呼びかけた。

わたしの一品　読者のレシピから

栄養豊か 秋の野菜料理募集

「きょうの一品」欄のスペースで毎月第４週に読者のレシピを紹介する「わたしの一品」。11月のお題は「秋の野菜料理」です。

収穫祭も一段落、秋野菜が出回り、冬を前に味わい深く栄養豊かな野菜料理が恋しい季節です。カボチャ、ジャガイモ、ナスなど店頭に並ぶ野菜を使った料理のレシピを募集します。

匿名の応募は受け付けません。４品を選考し、11月第４週に掲載します。

レシピは、「きょうの一品」を参考に「材料」（２人分）と「作り方」、料理の感想などのコメントも合わせて360字以内でまとめてください。必ず鮮明な料理のカラー写真を付けてください。カロリーと塩分は必要ありません。

採用分には薄謝を贈ります。応募は住所、氏名、年齢、電話番号、職業・学年を明記、〒060・8711　北海道新聞生活部「わたしの一品」係へ。電子メール（seikatsu@hokkaido-np.co.jp）でも可。11月15日締め切り（消印有効）。問い合わせは生活部☎011・210・5605へ。

「いずみの集い」31日締め切り

北海道新聞社は11月28日（火）午後1時半から、北海道新聞小樽支社（小樽市稲穂2の8の4）で開く「いずみの集い・小樽編」の参加者を募集中です。

生活面の人気投稿欄「いずみ」の愛読者の交流イベントで、今回は後志管内在住者が対象です。

小樽在住の作家蜂谷涼さんのトークや、参加者による「私が好きないずみ作品」の紹介など、全体で2時間程度。女性限定で1人千円（コーヒー、ケーキ付き）。いずみ欄を切り抜いて貼れる「いずみ帖」を贈呈します。

30人募集し、応募多数の場合は抽選。①郵便番号②住所③氏名④電話番号―を記入し、はがきかファクス（011・210・6384）で、〒060・8711（住所不要）北海道新聞マーケティングセンター「いずみの集い」係へ。メール（mc-hp@hokkaido-np.co.jp）でも可。10月31日（火）締め切り。

問い合わせは同センター☎011・210・6006（平日午前10時～午後5時）。当選者に入場券を発送します。

いずみ　別れの記憶

夫と、道東在住だった父母が逝って13年になる。夫は63歳で4月に他界。その時は、95歳と93歳の父母も夫の死を悲しんでくれた。

しかし、2カ月後に母が倒れ意識が戻らないうちに8月に父が急死。それを知らない母も4時間後、追うように旅立ち、掛けつけた時は2人並んで寝かされていた。4カ月でこのように別れが続くと、死はまるで、隣に行くような近さだと感じた。

私は夫の1年半の闘病に添い、最期は、私が枕元で夫の好きな本を読んでいる間に息をひきとった。

母が倒れた際は、手を握りながら、耳元で、幼いころによく歌ってくれた童謡を思いつく限り次々歌った。何度も握り返してくれた手のぬくもりは今も忘れない。

父は入院中、車いすで病院の庭に出て、遠くに住む父の兄や弟、私の兄や妹と携帯電話でにこにこと話し、私が足の爪を切ってあげると喜んだ。父母との記憶は、会う機会が少なかったためどれも温かい気持ちになる。母が「父さん、美祢子生んで良かったね」と言ってくれたことは、私の一生の宝となっている。

夫は看病期間が長かった分、「もっとああしてあげれば良かった」とか「こう言うべきだった」と後悔が消えずにいた。これからは「ごめんね」だけでなく、「あの時楽しかったね。おかしかったね。うれしかったよ」と、いつも心の中で話しかけたい。

佐藤　美祢子（72歳・主婦）

＝札幌市厚別区

投稿は女性だけ、600字で。郵便、ファクスは原稿用紙を使い、生活部「いずみ」係、電子メールはizumi@hokkaido-np.co.jpへ。題、住所、氏名（ふりがなも）、年齢、職業、郵便・電話番号を明記。趣旨を損なわずに加筆することがあります。原稿はお返しません。掲載分は電子版とデータベースに収録します。